

日経リヴァイブは日本経済新聞をご購読の皆さまにお届けしています。

未来を動かす、 次世代の挑戦者たち

2025年の大阪・関西万博で、次世代の息吹が躍動しました。
「いのち輝く未来社会」を描く一歩は、
若者たちの問いと行動から
始まっています。



世界に開かれた 「未来社会の実験場」 大阪・関西万博

2025年4月、大阪・夢洲で開催した大阪・関西万博のテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」。医療、環境、教育、共生など、未来の課題に人類がどう立ち向かうか、そのビジョンと技術が集結する、持続可能な社会のモデルケースとしての万博となりました。会場内では150を超える国・地域や国際機関がパビリオンを展開し、先進技術や文化の交流を通じて、世界規模の連携や共創の可能性が提示されています。

中でも注目されているのが、「TEAM EXPO 2025」プログラムの展開です。これは、万博のテーマに共感する個人や団体が社会課題解決に挑む「共創チャレンジ」を自ら企画・実行するという、過去の万博にはない試み。展示を「見る」だけでなく、万博に「参加」する人々の力で未来を描くこの取り組みに、全国から2000件を超えるプロジェクトが集まり、まさに「未来社会の実験場」として機能しています。

こうした取り組みは、開催都市・大阪をはじめ、各地の若者や地域にも少しずつ広がりを見せています。テクノロジーと創造性が交わるこの場が、社会に前向きな変化をもたらすきっかけとなることが期待されています。

若者の問いと行動が、 未来の輪郭を描く

「TEAM EXPO 2025」において、若者たちは重要な担い手の一角を占めています。Z世代を中心とする大学生や高校生たちが、気候変動、少子高齢化、教育格差、食糧問題といった身近な問題意識を起点に、プロジェクトを企画・実行し、成果を社会に還元するまでのプロセスに主体的に関わりました。

彼らが示したのは、持続可能な開発目標（SDGs）や社会課題を「自分ごと」として捉える態度と、デジタルネイティブとして多様性を当たり前に受け止める柔軟さ。学校や地域とも連携しながら、粘り強く対話を重ね、社会を変える小さな一歩を積み重ねています。

「いのち輝く未来社会」とは、企業や行政だけではなく、一人ひとりの気づきと行動によって築かれるもの。そうした可能性に触れられる場面が、今夏の万博にはいくつも見られます。

そして今、その小さな挑戦は、同世代の共感や地域社会の支援を受けながら、確かな広がりを見せ始めています。

共創から、 次世代のリーダーを

若者たちが未来を変える鍵となるのは、知識やスキルだけではなく、ありませぬ。「なぜこの問題が解決されないのか？」「自分にできることは何か？」——そんな問いを持ち、他者と交わり、社会とつながるプロセスそのものが、未来を共創する力になります。

企業や地域社会も巻き込んだこの共創の流れは、今後ますます広がりを見せるでしょう。

共創チャレンジに関わった若者たちの声や、その成長を支えた大人たちとの対話を通じて、これからの社会に求められる「次世代リーダーシップの形」を紹介していきます。

TEAM
EXPO
2025



「TEAM EXPO 2025」プログラムは、大阪・関西万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」を実現し、SDGsの達成に貢献するために、多様な参加者が主体となり、理想としたい未来社会を共に創り上げていくことを目指す取り組みです。

TEAM EXPOで広がる「共創」の輪

社会課題を自分ごととして捉え、問いを原動力に一歩を踏み出した若者たち。彼らの挑戦の軌跡は、共感を生み、仲間を巻き込み、やがて「共創」の輪へと広がっていきます。

ここでは、大阪・関西万博の「TEAM EXPO 2025」プロジェクトに参画する4つの学生団体の中心メンバーにフォーカス。「なぜ、この活動を始めたのか？」その問いから生まれた物語を紹介します。



慶應義塾大学公認学生団体
S.A.L.「ロヒンギャプロジェクト」
慶應義塾大学3年
小澤 奈央さん

ロヒンギャ難民支援を通じて
格差社会の構造課題に迫る

「ロヒンギャプロジェクト」は、イスラム系少数民族ロヒンギャ難民の2世にあたる子どもたちを対象に、オンラインでの学習支援や群馬県館林市での対面学習会、大学・企業の見学イベントなどを実施しています。活動を通じて見えてきたのは、子どもたちの学力不振の原因は「難民だから」ではなく、「経済格差」や「情報格差」といった日本社会全体が抱える構造的な課題が根底にあるということ。幼少期に海外を転々としていた私は、国際的な課題である難民問題と、日本の格差社会問題の両方に興味があり、プロジェクトの活動が課題解決の足掛かりになると思

力不振の原因は「難民だから」ではなく、「経済格差」や「情報格差」といった日本社会全体が抱える構造的な課題が根底にあるということ。幼少期に海外を転々としていた私は、国際的な課題である難民問題と、日本の格差社会問題の両方に興味があり、プロジェクトの活動が課題解決の足掛かりになると思



東京大学見学ツアー内の
ワークショップの様子

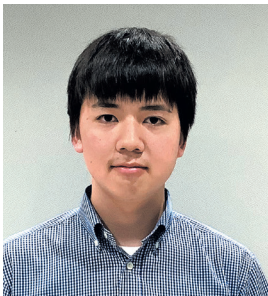
い、参加を決めました。

現在、3代目の代表を務めていますが、新聞などで私たちの活動を知ってくださった方



対面学習支援の様子

や、万博への出席を通じて出会った団体、企業、地域の人々の応援によって共創が広がっています。在日ロヒンギャの子どもたちに限らず、日本のすべての子どもたちが未来に希望を持てる社会にするために、支援の輪を広げたいです。



山陽学園中学校・高等学校
地歴部
山陽学園高等学校3年
柴本 悠汰さん

無関心層を巻き込む「ゆるやかな共創」でごみ問題に挑む

仲間と一緒に、瀬戸内海の海底ごみ回収と海岸漂着ごみ回収、さらにそれらの活動の啓発を行っています。活動の継続の中で、ふと疑問が湧きました。「なぜ、参加してくれるのはいつも同じ人たちなんだろう？」—そんな問い

が、僕たちのアクションの原点でした。課題意識の高い人だけでなく、無関心層や忙しい人たちにも届くアプロ

チが必要だと感じ、僕たちは「参加のハードルを下げる」仕組みとして、ごみの位置や種類を簡単に投稿できるスマホアプリを開発しました。サインイン不要、隙間時間に送れる手軽さが功を奏し、全国から約1400人が参加。これまでに38000件以上の投稿が集まり、清掃活動の現場でも活用されています。



海岸漂着ごみ回収の様子

さらには、地域のNPOや行政と連携して学校での授業やイベントにも展開。ICT(情報通信技術)の力と市民参加が融合した「ゆるやかな共創」が、少しずつ社会に波紋を広げています。僕が大切にしているのは、「市民はごみの廃棄者であり、解決者でもある」という考え方。清掃活動は小さな一歩かもしれませんが、それが誰かの価値観を変え、行動変容を促すきっかけになると信じています。



自作アプリで実際にごみ情報を投稿する様子

経験を通じて得た、共創の視点やリーダーシップは、活動の随所で生きています。自分たちだけでは成し得なかったことが、つながりによって形になっていく—その過程にこそ、価値があると感じています。これからも竹の可能性を信じ、教育や商品開発を通じて、持続可能な未来への一歩を重ねていきたいと思っています。



制作した竹燈籠の前で

都西山竹あかり幻想夜2024」の開催など、地域の企業や自治体、農家の方々と連携して活動を広げています。

近年の暑さ厳しい夏、クーラーや携帯扇風機などの便利グッズに頼る一方で、「環境への負荷が大きいのでは」と感じる瞬間がありました。ふと昔の暮らしに思いをはせると、自然素材で作られた扇子やうちわなど、環境と調和した道具に人々の知恵が宿っていたことに気づきます。そこから「竹」という素材に興味を持ち、調べてみると、抗菌性、軽さ、強度といった驚くべき特性に加え、放置竹林や森林破壊といった社会課題にも直面しました。そうした気づきが原点となり、プロジェクトを立ち上げました。放置竹林の整備に参加しながら、竹炭塩「竹野姫」の商品化や、竹あかりイベント「京都西山竹あかり幻想夜2024」の開催など、地域の企業や自治体、農家の方々と連携して活動を広げています。

竹の可能性を信じ「世代・地域・未来」をつなぐ

「防災って大切だって、みんなわかっているのに。なんで誰も行動しないんだろう？」そんなモヤモヤが、僕の問いの原点でした。仙台出身の友人が語ってくれた東日本大震災の記憶に触れた時、自分と社会の温度差に強い違和感を覚えました。



BambooBridge
関西学院大学4年
堀 健人さん

思いを届ける“防災ギフト”で文化を創る

「防災って大切だって、みんなわかっているのに。なんで誰も行動しないんだろう？」そんなモヤモヤが、僕の問いの原点でした。仙台出身の友人が語ってくれた東日本大震災の記憶に触れた時、自分と社会の温度差に強い違和感を覚えました。



一般社団法人OLEA
匠 祐亮さん

そして生まれたもう一つの問い—「震災の教訓は、どうすれば次の世代に受け継がれるのか?」。そこから「防災用品をギフトにする」というアイデアが生まれ、若者が自然に手に取れるポップアップストアを企画しました。

初めて挑戦したクラウドファンディングでは170人以上から支援を受け、全国各地での出店につながりました。防災食メーカーとの連携では、廃棄予定の食品を返礼品として活用。食品ロスの削減にも貢献できたのは、企業や自治体との共創のおかげです。

活動を続ける中で学んだのは、「まったく思えば人を動かす」ということ。防災を押し付けではなく、誰かを思う気持ちとして届けたい。今後は教育現場や地域と連携しながら、「新しい防災文化」を一



新宿高島屋でのポップアップストアの様子

現在、「TEAM EXPO 2025」プログラムには、2044件の共創チャレンジが登録されています。

ここでは若者が主体となっている活動の一部をご紹介します。

農業・地域活性化

Pointillism

農業体験を通したコミュニティづくり

<https://team.expo2025.or.jp/ja/challenge/957>

教育・海外支援・協力

株式会社ロジグリッシュ

最新の学術研究を導入した英語教育プログラムの提供

<https://team.expo2025.or.jp/ja/challenge/1117>

次世代教育

WAT'er

大学生メンターによる高校生へのオンラインメンタリング活動

<https://team.expo2025.or.jp/ja/challenge/148>

次世代教育

イマクリ

五感を使う体験とICTを活用したワークショップを探究学習として展開

<https://team.expo2025.or.jp/ja/challenge/1492>

「共創」の学びが社会を変える

コラギアが育てる、次世代リーダー

変革を生む「目的・志を持ったリーダー」「エッジソン」を社会へ
未来をつくる人材育成の拠点

一般社団法人エッジソン・マネジメント協会の取り組み

未来を担う若者たちに、どのような学びと機会を届けたいのか。

社会課題の複雑化や価値観の多様化が進む中、これからの時代を生きる次世代には、単なる知識やスキル以上に、「問いを持つ力」「他者と交わる力」「答えのない課題に挑む力」が求められています。

そうした時代背景のもと、2018年に始動し、2022年に設立されたのが一般社団法人エッジソン・マネジメント協会です。企業の人材開発支援などを手がける株式会社リンクアンドモチベーションが中心となり、多様な業界の有志企業が集まり、「世界で最も若者が育つ社会の実現」を目的として発足。「エッジソン」とは、「Edge（鋭利さ）」と「Person（人）」を掛け合わせた造語で、就職活動とは一線を画す、官民学の垣根を越えた連携と実践的な学びの機会を提供することで、目的や志にとがった若者「エッジソン」を社会全体で育てることを目指しています。



若者の「問い」が社会を動かす

共創から始まる次世代リーダーの挑戦

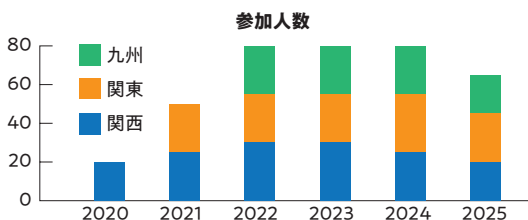
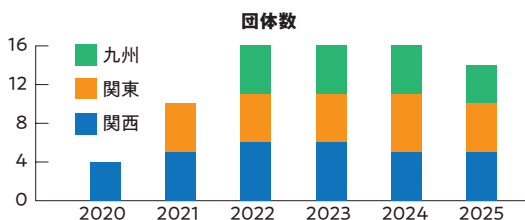
「コラギア」プロジェクトの概要

その中核となるプロジェクトが、次世代共創リーダー育成プロジェクト「コラギア（Co-Lab Gears）」です。「コラギア」とは「Co-laboration（共創）」と「Gears（歯車）」「一人ひとりの力」を掛け合わせた造語で、異なる価値観をもつ若者たちが連携しながら、社会課題に立ち向かう姿を表現しています。

大阪関西万博「TEAM EXPO 2025」の共創パートナーとして、SDGsの達成に貢献する「共創チャレンジ」を創出し、多世代・多セクターの連携を通して学生ユース団体の成長を支援。2020年の第1期から2025年3月の第5期までに350人を超える共創リーダーと70件を超えるプロジェクトが生まれ、今年10月12日（最終展示日）には万博会場での発表・展示も予定されています。2030年リヤド万博に向けてアジアへの展開も視野に入れています。



これまでの実績



共創支援企業

＜関西＞ パナソニック オペレーションエクセレンス株式会社／川崎重工業株式会社／関西電力株式会社／京セラ株式会社／佐竹食品株式会社

＜東京＞ 株式会社日立製作所／清水建設株式会社／株式会社ネイチャーラボ／株式会社みずほ銀行／横河電機株式会社

＜九州＞ アイ・ケー・ケーホールディングス株式会社／ハウステンボス株式会社／株式会社タカギ／株式会社別大興産

※参画順

実践が育てるリーダーシップ

8カ月で「行動する若者」へと変わる成長の旅

コラギアの人材育成のプロセス

コラギアでは、8カ月間の育成プログラムを通じて、社会課題に挑むリーダーを育てています。プログラムは3つのフェーズで構成され、まずは事務局が編成したチームで課題解決型学習（PBL）の基本を実践。その後、学生自身でテーマやチームを決めてプロジェクトを立ち上げ、現場での実践を通して共創力を高めます。最終フェーズでは成果発表を行い、支援企業の社員や事務局からフィードバックを受けて自らの成長を客観的に捉える機会が設けられます。

参加学生には支援企業14社から派遣された若手・課長クラスの社員がメンターとして伴走し、世代や業界を越えた対話と実践によって視野を広げていきます。単なる座学ではなく、現実の社会課題と向き合いながら、自分なりの問いを起点に行動し、成果を社会に還元するプロセスが最大の特長です。また、コラギアは単なる学生向けの教育プログラムではなく、支援企業にとっても、次世代と共に学ぶことで気づきを得る「共育」の場として設計されているのも特長の一つ。

参加学生との対話を通じて、自社の価値観や人材育成方針を見直したという企業もあります。また、若者のリアルな声に触れることで、従来の企業の社会的責任（CSR）や採用活動とは異なる接点を見いだす例も増えています。



協会が目指しているのは、教育でも経営でもない、その間にある「育成共創」の場。若者にとっては、自分の問いを探究するプロセスであり、企業にとっては、未来の社会と向き合う装置となっています。

参加学生の声

コラギア
6期生
立命館大学1年
松村真帆さん

”問い“から始まる未来。
給食で、世界を変える。

「社会課題にどう立ち向かうか」を本気で考えたくて、コラギアに参加しました。自分の興味を形にし、長期的に取り組む力を身につけたいと思ったんです。

高校時代から給食に強い関心があり、大阪関西万博のバーチャルバビロンに向けた出展活動にも取り組んできました。でも、展示という一つのゴールの先に何を指すのか、自分で定めることができず、もどかしさを感じていました。私は、目の前の活動には全力で取り組みますが、答えのない問いに向き合うのが苦手。だからこそコラギアでは、自分の中にある問いを深めて、ブレない軸を育てたいと思っています。

活動のきっかけは、フィリピンのスラム街で出会った子どもたちの姿。日本では当たり前にある給食が、世界では「特別な存在であることに気づきました。食を通じて教育や貧困と向き合い、社会を変える力になったらーそんな思いを、同じ志を持つ仲間たちと一緒に磨いていきたいです。

コラギアでの活動は始まったばかりですが、すでに多くの刺激をもらいました。まだ不安もあるけれど、パッションだけは誰にも負けないつもりです。

卒業生の声

コラギア
2期生
大阪公立大学大学院1年
島小雪さん

”変であること“が誇りに変わる。
農業から始まった、私の共創リーダーシップ。

「自分の街がもっと好きになる活動がしたいーそれが、私がコラギアに参加した理由でした。大学1年生の授業でエッジソン・マネジメント協会の榎原さんの話を聞き、「共創リーダーとして大きな世界に羽ばたけるのでは」と感じたんです。

地元・四條畷の活性化を目指し、仲間と立ち上げたのが、農業体験を通じて、日常の中の幸せを育てる「ポイントリズム」。子どもたちと畑を耕し、収穫し、調理して食べるーそのプロセスに地域の大人や飲食店も巻き込むことで、食と人とのつながりを実感してきました。

その集大成として、夢だった万博出展も実現。子どもから大人まで幅広い層が私たちの体験ブースを楽しんでくれて、「農業の価値をどう伝えるか」をずっと考えてきた私にとって、本当に感慨深い瞬間でした。

活動の中では、うまくいかないことやメンバー同士の衝突もありましたが、「自分と相手を信じること」の大切さを学びました。コラギアの魅力は、自分の「変さ」を誇っていると思える環境があること。互いの違いを認め合える場所だからこそ、自分をさらけ出し、やりたいことに挑戦できたと思います。



「未来を信じる力が、人を育てる」

若者と真剣に向き合う大人たちの思い

次世代のリーダーを育てるには、知識やスキル以上に「未来を信じる力」が必要。コラギアの活動を支えるのは、そんな信念を胸に若者と真剣に向き合う大人たちです。異なる分野で経験を重ねた5人の理事が、それぞれの立場から語ったのは、若者に託す思い、育成の現場で感じる可能性、そして共に成長する喜び。多彩な視点から見えてきた、人を育てるという営みの本質に迫ります。



株式会社リンクアンドモチベーション
エグゼクティブディレクター
エッジソン・マネジメント協会
代表理事
梶原 洋平氏

大阪・関西万博発のコラギアを起点として世界中で「共創リーダー」を育成したい

コラギアの目的は、外部と連携しながら構想から実行まで進められる「共創リーダー」の育成です。1日研修ではなく、学生が8カ月をかけてチームで課題に挑むことで、一人ではできないことをやり遂げる難しさと面白さを学びます。この体験こそが「共創」の価値です。

産官学が連携し、企業・行政の管理職や若手社員、大学教職員が、自ら参加した学生たちと真剣に向き合います。万博を起点に生まれたこの枠組みを「社会が若者を共創で育てる文化」として次世代に残すことが私たちの使命です。

リーダーシップの本質は「約束と実行」。否定に直面しても目的をやり遂げる経験ができる場として、コラギアは毎年進化しています。岐阜・徳島・長崎などで地域版が始まり、今後は東京と九州を結ぶ越境型の仕組みも構想中です。教育を軸に地域や世界をつなぐエンジンとなることを目指します。



参加学生からは実際の成果も生まれています。大阪公立大学の藤川翔帆さん(当時2年)

は、大学発ベンチャー1号としてオンライン英語教育の会社を起業しました。アイデアだけでなく実行力を備えた人材がここで育っています。

私の夢は、日本を人材育成先進国にすること。コラギアをその旗艦となるプログラムに育て、ここで生まれるネットワークが世界を動かす力になることを願っています。



株式会社セラ
東京事業所 兼 人事企画部
学学連携推進部 責任者
大西 実氏

コラギアには活動量と思いを併せ持つ学生が集まっている

今、世の中を動かしているリーダーは、活動量と思いを兼ね備えています。コラギアにはまさにそうした学生が集まっており、その姿に注目しています。彼らと接する時は同じ目線に立ち、一緒に課題に向き合うことを心がけています。大人が一方的に正しいのではなく、むしろ異なる意見に戸惑いながら、自分の力で壁を乗り越えてほしいのです。

一方、コラギアの活動に参加して思わぬ発見となっているのが、自社の若手社員の成長です。学生たちと一緒にディスカッションをする、また、アドバイスをする機会を経験することで、徐々に目が輝いてきます。コラギアの場合、自分の仕事を再認識すると同時に、若者たちの熱量から刺激を受けるようなのです。大企業はどうしても同じ価値観の中にとど



まりがちです。社会人こそ、もってこいいう場で他流試合をして、社会における自分の立ち位置を見つめ直す機会を持つべきだと思います。

コラギアに期待するのは、とにかく継続することです。教育には時間がかかります。結果が出るのは10年後か20年後かもしれない。それでも日本の財産である若者のために企業側も本気で取り組むべき活動だと思います。ここから将来の日本を動かすようなリーダーが生まれることを期待しています。



株式会社日立製作所
人財統括本部 人財業務本部
本部長
進藤 武揚氏

若者にとって大きなチャンスの時代「一人称で考える」ことが価値になる

梶原さんとは20年以上前、私が日本の採用担当として日立で働いていた時に初めて出会いました。一緒にプロジェクトを進めた後、私は日立ヨーロッパ社へ出向しました。帰国すると、人材市場は大きく変化しており、大手メーカーでさえ採用が非常に難しくなっていました。「日本のものでつくりを担う若者はどこへ行ったのか」と強い危機感を抱いた私は、企業の枠を超えて若者を育成したいと考え、梶原さんが主宰するコラギアに協力することにしました。

コラギアの学生たちと接していて毎年驚くのは、成長スピードの速さです。わずか8カ月伴走するだけで、受け身だった学生が自ら考えて行動できるようになっていくのです。学生の成長を促すため、私たちはコラギアの活動で学生の課題に向き合う際、一貫して



「一人称で考えること」を求めます。すぐに成果を出そうとしたり、大人の評価を気にしたりせず、「君はどう思うのか」を徹底的に問い

かけます。

今は生成AI(人工知能)のような新しい技術が次々に登場し、若い世代にとっては可能性が大きく広がる時代です。かつては欧米のやり方をまねして製品を早く安く作ればよかったのですが、今は「何が正解か」を誰もわからない時代です。だからこそ、自分の頭で考え、自分の言葉で答えを出す力が何よりも価値を持つのです。



清水建設株式会社
関西支店 総務部長
綿引 秀樹氏

ビジネスの視点で若者をサポート多様な個をつなぎ広げる力を磨く場所

当社の社是である「論語と算盤(そろばん)」は道理にかなった企業活動を通じて、社会に貢献し、その結果として適正な利潤を得るという考え方です。コラギアへの参加はまさに「論語」に通じるものであり、若者の成長をサポートすることで、未来づくりに責任を果たしていきたいと考えています。

コラギアに参加する学生たちは、社会を本気で変えたいという強い意思を持っていますが、それを実現するための術をまだ知りません。自分一人だけで実現できることは限られています。異なる価値観や背景を受け入れて、大人たちも含めて、どのように仲間やパートナーづくりを行い、自分の思いを実現するためには何が必要かを考えてもらっています。学校の授業とは異なり、正解はありません。共創リーダーとして、論理と情熱のバランスを体得することが、これから社会に出て、飛躍するための最初のステップだと思います。



近年、若者の間で「タイムパフォーマン(ス)」を重視し、失敗を「無駄」と考える傾向があります。しかし、失敗はすべてが学びであ

り、物事を成し遂げるために必要なプロセスです。コラギアでは、これまでの「学んで做う」学習から「学びながら問いを立てる」学習にシフトし、失敗を恐れずに挑戦するリーダーとなることを期待しています。



パナソニック オペレーショナル
エクセレンス株式会社
リクルート&キャリアクリエイトセ
ンター センター長
坂本 崇氏

万博後も続く共創の場づくりソフトウェアとして残す仕組みを

2023年にコラギアの理事を前任者から引き継いだ際、若者のメーカー離れが進む中で、パナソニックだけでなく日本の製造業全体の存在感を高めたいという思いがありました。昔の「松下」の時代とは違い、企業名を知らない学生も増えています。採用のためだけでなく、学生自身の成長につながる活動を支援し、その過程で企業を知ってもらえる場が必要だと感じています。

コラギアに参加する学生は目的意識が高く、時に社会人にも臆せず意見をぶつけてきます。そんな姿勢に刺激を受ける一方で、活動が年々広がる中、当初よりもコラギアに参加する目的意識が薄れてきているようにも感じます。恒例行事化させないよう、参加する学生のマイノリティや実行力をさらに高める仕組みの検証は必要だと考えています。

今後のコラギアに求められるのは「実装力」を伴うリーダー育成です。課題解決のアイデアを出すだけでなく、実際に世の中で形にし、人の役に立つ経験が必要です。そのためには、大人が過度に主導するのではなく、学生が自ら考え抜き、必要な場面で背中を押せる仕組みを整えることが重要。万博が終わった後もソフトウェア(遺産)として協会の活動をどう次世代につなぐか。コラギアを経験した先輩学生や企業、社会全体が、継続的に共創の場を支える体制づくりが不可欠です。



共創の未来を、 社会全体で育てていく コラギア支援企業から若者へ、熱いメッセージをお届けします。企業と若者が手を取り合いながら、多様な視点で共創の未来を切り開いていく、その一步一步を社会全体で支え育てていきましょう。	 パナソニック オペレーションエクセレンス株式会社 リクルート&キャリアクリエイティブセンター センター長 坂本 崇氏 仕事はゴールではなく、あくまで「手段」です。誰の役に立ちたいのかを考え、その思いを実現できる道を探してください。コラギアは、自分の興味や好奇心を深掘りし、挑戦を通じて実行力を磨ける場です。仲間やメンターとの対話を重ね、自らの答えを形にしてください。その経験が、未来のキャリアを切り開く確かな力になります。	 Powering your potential 川崎重工業株式会社 人財開発部採用課 課長 渡邊 裕介氏 コラギアの人材育成理念に共感し、参画しました。社会課題の解決を掲げる当社にとって、その志は目指す姿と重なります。若者に期待するのは、挑戦を貫く姿勢。社会人とは異なる視点から積極的に発信し、壁にぶつかっても粘り強く取り組む姿から、私たちも成長とやりがいを学んでいます。
 関西電力株式会社 人財・安全推進室D&I推進・人財開発グループ マネージャー 小川 裕之氏 コラギアの「集団で考え判断し行動する」仕組みは、若者が今後、社会に出る上で不可欠なスキルを育みます。彼らが正解のない問いに向き合い、仲間同士で刺激し合う場面は印象的でした。ここでの経験は、若者の財産になると同時に、当社社員の固定観念を打破し、新たな視点を得る貴重な機会にもなっています。	 京セラ株式会社 東京事業所長 兼 人事企画部 産学連携推進部責任者 大西 実氏 今の若者には、コラギアのような「失敗の場」を用意することが非常に重要です。ここで盛大に失敗して学び、さらに大きなチャレンジにつなげてほしい。背伸びしているうちに足が長くなるものです。ここで手応えをつかんで、3年後、5年後の自分自身にもっともっと期待してほしいと思います。	 佐竹食品株式会社 人財開発部新卒採用課 課長 大塚 達也氏 学生や他社と協働することで新たな視野を得られ、社内人材育成のきっかけにもなりました。提案の質に差はあれど、長期間全力で取り組む姿勢は素晴らしく、最後まで走り切った学生は今後も困難を乗り越えられると思います。皆さんの可能性は無限大。チャンスと感じたら臆せず挑戦してほしいです。
 株式会社日立製作所 人財統括本部 人財業務本部 本部長 進藤 武揚氏 コラギアの活動を通じて、私も学生たちのアイデアから大いに学んでいます。ここでさまざまな社会人と接し、議論を繰り返しながら自分なりの美意識を形成し、それを思い切り社会にぶつけてほしい。日本を飛び出し、世界を動かすリーダーの背中を押す活動を地道に続けていきたいと思っています。	 清水建設株式会社 関西支店 総務部長 綿引 秀樹氏 社会課題の解決という大きな目標に対し、「着眼大局 着手小局」の精神で、考えるだけでなく、まずは一歩踏み出すことが大切です。コラギアは、情熱を持ち、仲間と話し、学び・問い続け、失敗を恐れずに挑戦できる最高のフィールドです。コラギアを通じ、未来の共創リーダーとして飛翔してほしいです。	 株式会社ネイチャーラボ 営業管理部 シニアマネージャー 行岡 宏明氏 当社は『ひとに強さを。』を理念に、人々の背中を押す存在を目指しています。未来のリーダー育成への熱意を受け、私たちも若者を支える一助になればと協賛しました。「学ぶ」は古語の「まねぶ＝まねる」に由来し、学ぶ環境やまねる対象は自ら選べます。先人の知恵に学び、共に未来を楽しく創っていきましょう。
 株式会社みずほ銀行 イノベーション企業支援部 江端 仁美氏 日本の国際競争力を高めるためには、若い世代のアントレプレナーシップ(起業家精神)が不可欠だと考えています。学生の皆さんが仲間と議論を重ね、挑戦し続ける姿に、次世代リーダーの素質を感じました。失敗や挫折は挑戦の証であり、成長の糧です。行動力とチームワークを武器に、未来を切り開いてほしいです。	 Co-innovating tomorrow™ 横河電機株式会社 人財総務本部 人財戦略室管理課長 佐々木 史子氏 SDGs達成に向け社会課題へ挑む若者の姿に、未来社会の共創の原点を感じました。仲間と企画を練り上げ、企業や自治体を巻き込んで実行する姿は頼もしく、フィードバックを重ねて成長する姿に大きな可能性を見えています。思いを信じ、仲間と共に挑み続けてください。その歩みが社会を変える力になると信じています。	 アイ・ケイ・ケイホールディングス株式会社 人事部人事課 リーダー 古谷 真雅氏 コラギアへの参画は、日本を盛り上げる次世代リーダーを育てたいという思いからです。私たちはスキルではなく本質を追求し、人と人のつながりこそが幸せの源だと考えています。この経験を学生に伝え、AIに代替できないリーダーシップを育む場にしたい。先行きが不安でも、未来を創るのは皆さん自身です。素敵な未来を創っていきましょう。
 ハウステンボス株式会社 人事部人事研修課 課長 川口 盛平氏 将来に高い志を持つ学生を支援し、その成長を間近で見たい、若者が育つ社会づくりに貢献したいと考え参加しました。サポートの過程で私自身も成長したいと思っています。約8カ月間の活動では、他大学の仲間と切磋琢磨(せつさたくま)しつつ、企業のメンター陣の助言を生かし、次世代を担うリーダーとして大きく成長してほしいです。	 株式会社タカギ 総務人事部人事課 担当係長 谷垣 直人氏 世代や業種を超えて共創し学び合える場に大きな可能性を感じています。参画を通じ、社員の視座が広がり、物事を社会・地球規模で捉える意識や他者に寄り添う姿勢が培われました。若者の皆さん、失敗を恐れず挑戦し、多様な価値観に触れながら自分の枠を超えてください。その経験が未来を切り開く力になります。	 人と人との信頼コミュニケーション 株式会社別大興産 総務部 課長代理 山田 裕貴氏 「100のアイデアよりも1の実行」を重視し、協働しながら課題解決に挑む共創リーダーの成長を期待しています。チーム全員で同じ方向を向いて、プロジェクトを形にすることより、実際に一歩を踏み出すことはもっと難しい。失敗を怖がらず、周囲の支援を得ながら積極的に挑戦してください。行動だけが大勢を巻き込む大きな力となります。

コラギア×万博 未来の共創リーダーステージ開催決定!

次世代の若者たちが日本や世界各地から集い、共創チャレンジを自由にクリエイティブに発信するステージイベントを開催します。本イベントは、大学生や高校生、留学生など多様な学生が提言と対話を行い、新たな共創の形を探求します。オンラインで海外在住の学生も参加し、ワークショップを通じて多様な共創パートナーと交流する場となります。

ステージの企画・運営は未来の共創リーダーである学生が主体となり、万博の他のパビリオンとも連携しながら「実行委員会」を組成し、リーダーシップを発揮して進めていきます。

次世代の挑戦と成長を間近で感じられる貴重な機会です。ぜひご注目ください。

【日時】 2025年10月12日(日)10:00～21:00 【会場】 TEAM EXPOパビリオン



▲詳しくはこちら